

A decorative border with a repeating floral and vine motif surrounds the text. The top border is a horizontal line with a small floral flourish on the right. The bottom border is a horizontal line with a small floral flourish on the left. The left and right borders are vertical lines with a small floral flourish at the top and bottom.

新潮日本古典集成

無 名 草 子

桑原博史 校注

新潮日本古典集成（第七回）

無名草子^{むみょうぞうし}



定価 一〇〇円

昭和五十一年十二月五日 印刷
昭和五十一年十二月十日 発行

校注者 桑原博史^{くわはら ひろし}

発行者 佐藤亮一^{さとう りょういち}

印刷所 大日本印刷株式会社

発行人 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 東京03(二六六)五一一一(業務)

振替 東京03(二六六)五四一一(編集)

装画 佐多芳郎^{さた よしろう}

組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例	三
----	---

無名草子	五
------	---

解説	二三
----	----

付録	
----	--

本文訂正一覧	一七
--------	----

索引	一五
----	----

凡 例

一、十三世紀初め、藤原俊成しゅんぜいきょうのむすめ卿女によって執筆されたと推定される『無名草子』の伝本には、現在、彰考館文庫蔵「建久物語」、天理図書館蔵「無名物語」（藤井乙男博士旧蔵）、群書類従第三一二収録本の三本の存在が知られている（ほかに無窮会図書館蔵本があるが、これは群書類従本の転写本）。本書は、群書類従本を底本として、彰考館文庫蔵本、天理図書館蔵本を参考に、本文を作成した。

一、底本の仮名づかいは歴史的仮名づかに統一し、仮名に適宜漢字を宛て、漢字は現行の字体に改め、また句読点や会話の「」、振り仮名等を付けて、読みやすいようにした。また、本文や頭注の中で書名や、本文中の『源氏物語』の巻名には『』を付して、人名と混同しないように配慮した。

一、底本の本文はなるべく尊重するようにつとめたが、そのままでは明らかな誤写で意味の通じない箇所があり、その大部分は他本を参考にすることによって修正できる。それ以外にも、底本の本文のままでは読解にさしかえる箇所があり、それは私見によって訂正した。これらについては頭注では一々ことわらなかったが、巻末に本文訂正一覧としてあげた。

一、本文を内容に則して区切り、それぞれを二行アキとした。その中で源氏物語論の部分は、作者の

もっとも力を入れた箇所であるので、「巻々の論」「女性論」「男性論」「ふしぶしの論」とわけ、「女性論」はさらに、めでたき女・いみじき女・好もしき女・いとほしき女の四項目に、「ふしぶしの論」はあはれなること・いみじきこと・いとほしきこと・心やましきこと・浅ましきことの五項目に細分して、作者の主張を充分に理解できるようにした。作品の結論をになう末尾の女性論も、とりあげられた人物それぞれについて本文を区切って、この書が全体としても女性論を主題としたものであることが明らかにするようにした。

一、傍注（色刷り）は本文の現代語訳、頭注は語釈・出典・用例等の説明であるが、スペースその他の関係で、現代語訳の一部を頭注に掲げた場合もある。なお、傍注に現代語訳をつけるに際して、省略されている文の意味や主語などを補った場合は「 」を用いた。

一、本文の理解を助けるために、適宜小見出し（色刷り）をつけ、◇印でその部分で論じている対象の解説を、*印で簡単な読みどころのまとめを付した。

一、解説は、作者俊成卿女のおかれていた女性史上の位置、またその結果として生れたこの作品の女性論としての特色について述べた。

一、付録として、巻末に本文訂正一覧および書名・人名・和歌・源氏物語関係の索引を付した。

無
名
草
子

一 八十三歳になるまでの年月が。以下、この老尼が会話口調で評論のはじまりまでの事情を読者に語るのが、いとぐちの内容。

二 現世に人として生を受けた証として出家することによって、極楽往生を遂げ、来世の幸福を期待するのである。「憂き世」という語に、老尼の過去には苦勞の多かったことがしのばれるが、老尼にとってはもはや過去よりも、近づいている死、そして死後の世界の方が、関心事である。

三 墨染のころも身につけて。

四 僧衣の袂。「苔の衣の袂」の略。

五 白髪もふえ、顔のしわも増して。

六 現在の京都市東山区のあたり一帯。当時は郊外であつて、貴族の別荘や寺院が点在していた。

いとぐち

八十余り三歳の春秋、いたづらにて過ぎぬることを思へば、いと

大層

悲しく、たまたま人と生れたる思ひ出に、憂き世の形見にすばかりのことなくてやみなむ悲しさに、髪を剃り衣を染めて、わづかに姿

ばかりは道に入りぬれど、心はただそのかみに変ることなし。

歳月の積りに添へて、いよいよ昔は忘れがたく、古りにし人は恋

しきまに、人知れぬ忍び音のみ泣かれて、苔の袂も乾く世なき慰

めには、花籠を臂に掛けて、朝ごとに露を払ひつつ、野辺の叢にま

じりて花を摘みつつ、仏に奉るわざをのみして、あまた年経ぬれば、

いよいよ頭の雪積り、面の波も畳みて、いとど見ま憂くなり行く鏡

の影も、我ながらうとましかければ、人に見えむこともいとど慎まし

ければ、道のまに花を摘みつつ、東山わたりをとかくかかづらひ

一「世の中はいづこかさして常ならむ行きとまるをぞ宿と定めむ」(古今集)卷十八、よみ人しらす。

二「三界は安きこと無し猶火宅の如し」(法華經譬喻品)。この迷界は安らかなことなく、まるで火に包まれた住まいのようだ、の意。「三界」は、欲界・色界・無色界で、人間が生死をくりかえしている現実世界全体のこと。

三 後白河天皇の女御建春門院(平滋子)の発願によつて建てられた寺。東山南禅寺のあたりにあった。

四 天皇・皇后などが、死者の霊をとむらい、自分の極楽往生をも願つて建てた寺。「御願寺ども」の略。

五 金属類の裝飾を施した柱や、宝玉の飾りをつけた幡(仏前の左右に垂らす裝飾の布)。

六 唐紙障子の絵。最勝光院の唐紙障子には、似絵(肖像画)の名手藤原隆信・藤原光長らが、後白河院や建春門院の主催した日吉御幸・高野御幸などの行事絵を描いたと伝えられる。

七 (考えてみると今日は)五月十日か。「五月十日宵のほど」と解する説もあるが、「宵」(夜にはいつてから夜中までをさす)の語義から考えて、夕日のさす状況とは合わない。

ハ 夕日がくつきりと光をなげかけていらっしやるのも。西にある夕日を阿弥陀仏の光明と見て(二〇頁注一参照)敬語を用いている。

るうちに

だんだんに

すみか

あつくほどに、やうやう日も暮れがたになり、たち帰るべき住処も

遙けければ、いづくにても行きとまらむ所に寄りなむ、と思ひて、

「三界無安猶如火宅」と口誦みて歩み行くほどに、最勝光院の大門

開きたり。

うれしくて、歩み入るまに、御堂の飾り・仏の御様などいとおめ

壮麗で、極楽浄土もこうではないかしらと

でたくて、浄土もかくこそ、と、いよいよそなたにすすむ心催さる

ような気分がして、昔より古き御願ども多く拝み奉りつれど、かばかり御

心の御理想にかなったものは見あたらず

心に入りたりけるほど見えて、金の柱・玉の幢をはじめ、障子の絵

まで見どころあるを見侍るにつけても、まつ、この世の御幸ひも極

め、のちの世もめでたくおはしましけるよ、と羨ましく、伏し拝み

立ち出でて、西さまに赴きて京のかたへ歩み行くに、都のうちなれ

ど、こなたさまはむげに山里ふうでとも風雅な雰囲気です

五月十日余日のほど、日頃降りつる五月雨の晴れ間待ち出で、ハ

日はやかにさし出で給ふもめづらしきに、時鳥さへともなひ顔に

珍しいうえに 私をいざなうかのよ

此為试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

九時鳥は、「死出の田長」とも呼ばれて、冥途への道案内をする鳥と考えられていた。

「〇もう一度戻って鳴くほど、わたしに親しみを持っているのなら、時鳥よ、わたしはまもなく死ぬのだから冥途への道案内となっておくれ。「遠帰り」は遠くからもう一度戻ってくる。作品中、老尼の詠む唯一の歌。「この世にて語らひ置かむ時鳥死出の山路のしるべともなれ」(『新後撰集』巻十九、待賢門院堀河)を模倣したもの。

一成長した稲葉をそよがせて吹く秋風が今から想像できるような、すばらしい早苗が。「昨日こそ早苗取りしかいつのまに稲葉そよがせて秋風の吹く」(『古今集』巻四、よみ人しらす)。

二檜皮屋のごとで、檜の皮で屋根を葺いた家。

三寝殿(母屋)、対(離れの建物)、渡殿(屋根付きの渡り廊下)などらしき建物がほんの少し見えて。いずれも当時の貴族の住まいである寝殿造り(一〇頁頭注「図版参照」)の様式にそった建物群で、荒れたとはいえ築士(土塀)も門も備わっているのは、極めて上流の人の所有であつたらう。「少々」を「ことすみたる」にかかると副詞と見る説もあるが、間にある「いと」と矛盾する。

四『源氏物語』蓬生巻の記述(三〇頁参照)に拠る。一五よく茂っていて、ほんとうに時鳥がその蔭に隠れそうなほどです。「鳴く声をえやは忍ばぬ時鳥初卯の花の蔭に隠れて」(『新古今集』巻三、柿本人麿)。

うに鳴くのも、死出の山路の友と思へば、耳とまりて、語らふも、

遠帰り語らふならば時鳥

死出の山路のしるべともなれ

と、うち思ひ続けられて。こなたさまには人里もなきにや、と遙々と、

見渡せば、稲葉そよがむ秋風思ひやらるる早苗、青やかに生ひわた

りなど、むげに都遠き心地するに、いと古らかなる檜皮の棟、遠き

より見ゆ。

いかなる人の住み給ふにか、とあはれに目留まりて、やうやう歩

み寄りて見れば、築土も所々崩れ、門の上などもあばれて、人住む

らむとも見えず。ただ寝殿・対・渡殿などやうの屋ども少々、いと

ことすみたるさまなり。庭の草もいと深くて、光源氏の露分け給ひ

けむ蓬も、得意顔してたくさん茂っている中を、

ば、南面の庭いと広くて、呉竹植ゑわたし、卯の花垣根など、まこ

とに時鳥蔭に隠れぬべし。山里めきて見ゆ。前栽むらむらいと多く

一 四季咲きバラの漢名。

二 寢殿の南面は正面にあたる。

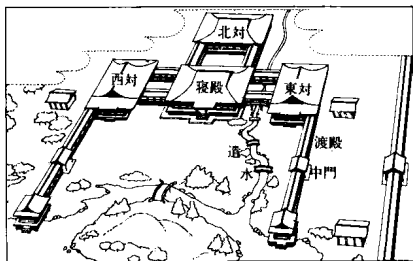
「間」は柱と柱の間をさす。柱三本の間は白紙障子にして、ほかは簾・板戸などで室内が見えないようにしてあるのだらう。

三 信仰する仏像を安置する建物。独立した小堂の場合もあるが、ここは、寢殿の一部を利用していることになる。

四 仏にささげるすぐれた香。

五 檜笠を首につけたままで。「吊されながら」は、自分の意志からでなく、仏にひかれておのずとその恰好になって、という感覚を表す。

六 十三絃の琴。本来中国の楽器で、女性用のもの。七 小野小町が臂に掛けていたとかいう花籠（籠）よりは、（あなたの方は信仰心で花を集め持っているのだから）いっそう立派な行為ですね。「小野小町」は一〇七頁参照。小町に関するこの話は出典不明だが、



寢殿造り

見ゆれど、まだ咲かぬ夏草の繁み、いとむつかしげなる中に、撫なで子・長春華ちやうしゆなまばかりぞ、いと心よげに盛りと見ゆる。軒近き若木の桜なども、花盛り思ひやらるる木立こだち、をかし。

花盛りの頃が想像できる

南面のなか二間ばかりは、持仏堂などにや、と見えて、紙障子

白らかに閉てわたしたり。絶えずたいている香の煙が

名香の香などかうばし。まづ、仏のおはしましける、と思ふもいと

うれしくて、花籠を臂に掛け、檜笠を首に吊されながら、縁に歩み

寄りたれば、寢殿の南東のすみ二間ばかり、あがりたる御簾のうち

に、箏の琴の音ほのぼの聞ゆ。

大層奥ゆかしくて誰がいるのかと思つていと

いと心にくくゆかしきに、若やかなる女声にて、

「いとあはれなる人のさまかな。さほどの歳にいかばかりの心にて、

いと見苦しげなるわざをし給ふぞ。小野小町が臂に掛けけむ籠より

はめでたく」

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

など言ふ人あり。

謡曲『卒都婆小町』の素材的な説話が、すでに成立していたものか。

へ 出家以前の釈迦（悉多太子と呼ばれていた）が教えを請うた仙人。太子はその命令通りあらゆる苦行をしたが、何ら得るところはなかったという（『法華経』提婆達多品第十二）。

ひ 色とりどりの生絹（艶出しをしない糸、すなわち生糸で織った布）や練貫（艶出しをした糸、すなわち練糸を横糸に、生糸を縦糸にして織った布）仕立ての衣服など。

一〇 見るからに、たいそう不愉快と思われるようなわたしの有様ですのに、遠ざけて見たりなさらずにね。文末「見などもし給はで」といいさして、言外に、なんとやさしいお人でしよう、の意をこめる。

一一 などと話しはじめて。老尼は女性たちのいたわりに一言感謝し、一呼吸おいて身の上を明かす。

一二 時にしみじみとした感動にうたれ（あはれにも）、またほほえましくも（をかしくも）、新鮮にも（めづらしくも）、あなたがたがお感じになるにちがいないあれこれの話題を。

「阿私仙に仕へけむ太子の御心より、ありがたくこそおぼゆれ」
（あなたのお気持の方が）貴重だと思えますよ

など言ふよりうちははじめ、同じような年頃の

の生絹の衣・練貫など、なえばみたる着て、縁に出でたり。所のさ
襦袢の落ちた常着を
場所がらが

ま、神さび古めかしかりつるほどよりは、めやすきさまなめるかな、
深遠で
雲間気にしては
親しみやすい人たちの様子ですこと

と見る。

「昔の身の有様、いかなりし人の果てぞ」
どういう人の身の果てなのですか
親身になって
口々に尋ねてくれるので

など、なつかしく問ひ尋ね合へれば、

「いとうとましげなる有様を、遠にて見などもし給はで。」
（を）一人前ぶって
お考えでいらつしやるのも
まだ若くていらつしやるのに

むげに若きほどに、慈悲深くものし給ひけるも、かかる仏の御あ
暮していらつしやるからでしょうか

たりにものせさせ給ふ御ゆるゑにや侍らむ」

など言ひはじめて。

「若くての身の有様、人々しくぞ、物など語り聞えむ、聞き所あり
（を）一人前ぶって
あれこれお話し申し上げても
聞くかいがある
歳をとつたお蔭で

とおぼしめさるべき者にも侍らず。ただ歳の積りには、あはれにも、
聞き集めて

をかしくも、めづらしくも、様々おぼしめされぬべきことを聞きつ

一 この仏前でお話しくださいな。人は尼、場所は仏前であることを考え、「懺悔」としやれた言い方をした。

二 建物の廊につけた手すり。欄干。

三 以下うち明ける宮仕え先や侍女程度の身分であつたことが恥ずかしいのではなく、経歴を語ることによつて年齢が分つてしまふことを恥じている。はじめ「八十余り三歳（七頁）」と名のつたのは、読者に対してのみ明かしたことであつた。

四 皇嘉門院（崇徳天皇の中宮藤原聖子）と申しました御方の母君である北の政所にお仕えして。「北の政所」は摂政・関白の妻の敬称で、この場合、皇嘉門院の生母である藤原宗子（関白忠通の妻。一一五五没）をさす。

五 崇徳天皇。天皇については次頁系図参照。

六 やはり内裏にたちこめる霞の中で花を愛で、同じ所で月をも眺めたい気持が。「九重の霞の迷ひ」は上皇御所（仙洞御所）をさすとする説もあるが、その場合本文は「九重の霞の洞」とありたい。ここは「九重の霞の迷ひ」「雲の上」とともに、内裏をさし、対句的に用語を変えたもの。

七 その結果、引続き内裏で勤務しました、の意がこめられている。

八 二条天皇。後白河天皇第一皇子で、後白河天皇在位の間（一一五五―一五八）東宮であつた。

いましたけれど、それも歳月が過ぎてしまふと、はつきりとはおぼえていませぬので、めて侍りしかども、それも久しくなりて、はかばかしくもおぼえねば、いとも情けないことですね、いとかひなしや」

申し上げると、と聞ゆれば、

「わたし達は」聞きたいわ

「それこそは聞かまほしけれ。さてさて、昔より身にありけむこと

も、聞きつめけむ世のことも、つゆ残らずこの仏のお前にて懺悔し

給へ」

と言へば、昔語りはげにせまほしくて、花籠・檜笠など縁にうち置

きて、勾欄に寄りかかりぬ。

「さて私の経歴は」世間並みのことにも及びませんけれど

「人なみなみのことには侍らざりしかども。恥かしながら、十六七

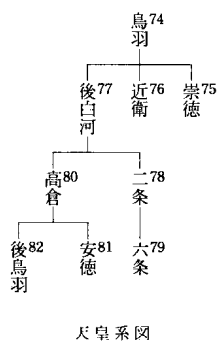
に侍りしより、皇嘉門院と申し侍りしが御母の北の政所にさぶらひ

て、讃岐院・近衛院など位の御時、百敷のうちも時々見侍りき。さ

「北の政所が」おなくなりになつて、出家された皇嘉門院様にお仕えするはずでしたが、

て失せさせ給ひしかば、女院にこそさぶらひぬべく侍りしかども、

なほ九重の霞の迷ひに花をもてあそび、雲の上にて月をも眺めまほしき心、あながちに侍り。後白河院、位におはしまし、二条院、東



九 一人前ではございませんでしたが。「人数」は、一人前に数えられること。

一〇「つくも髪」は老婆の髪。老齡の象徴として用いた。

二『法華經』一揃いを読み上げることをつまみなくしております。「一部」は書籍一揃いの称であるが、この場合、のちの文章からその書籍が『法華經』とわかる。

三 なまけてしまいました。これも、尼の言葉らしく仏教語「懈怠」を用いて答えた。

三 經典を納める袋。

四 經典を綴じ本にしたもの。普通は、巻子本(巻物)。

五『法華經』第一卷の終りの方。『法華經』は釈迦の最後の教義を記したもので、八卷二十八品からなる。

「方便品」はその第一卷末の第二品で、有名な經文を多く含んでいる。

宮と申し侍りし頃、その人数に侍らざりしかど、おのづからたち馴れ侍りしほどに、さるかたに人にも許されたる馴れ者になりて、六条院・高倉院などの御代まで時々仕うまつりしかども、つくも髪苦宮仕えも苦しい身になりましたので、頭剃して山里に籠り居侍りて、一部読み奉ること怠り侍らず。今朝とく出で侍りて、とかく惑ひ侍りつるほどに、今まで懈怠し侍りにけり」

とて、首に掛けたる經袋より冊子經取り出でて、読み居たれば、

「暗うてはいかに」

などと言いますので

「今は口慣れて、夜もたどるたどるは読まれ侍り」

とて、一の巻の末つかた、方便品比丘偈などより、やうやう忍びて、うちあげなどすれば、いと思はずに浅ましがりて、

「今少し近くてこそ聞かめ」

とて、縁へ呼びのぼすれば、

一 中門と他の建物とを結ぶ廊下（二〇頁頭注図版参照）。女性たちは老尼を正式な客扱いせず、気楽な雑談の場を設けたのである。

二 羅刹女（女惡鬼）十人のお蔭で、上にあがらせていただけましたわ。『法華經』陀羅尼品に、この經を読む人を十人の羅刹女が守る、とある。「殿上云々」は、中門の廊に呼ばれたことを、内裏の清涼殿殿上の間に昇殿を許されたことになぞらえた。尼であり宮仕えの経験者であることをふまえた機知。

三 今晩は私たちがお話相手となつて、このまま夜を明かしましょう。

* 「五月十日余日」（八頁）は梅雨の候であるが、晴れさえすれば満月に近い月が見える。古人は月を前に、自分の感慨を詩歌に託して歌つた。この邸の七、八人の女性たちが、老尼を迎えて優雅な座談の一夜を思いついたのは、そういう月と古人の心に触発されたのであらう。ところで、くわしく素性を明かした老尼は、以後はもっぱら横に臥して聞き手となり、身分経歴のわからぬこの邸の女性たちが中心となつて、お互いに語り批評して行く。批評はいつも批評する人間の人格と結びついているとすれば、誰とも知れぬこれらの女性たちの意見をどう受けとめたらよいか。これは、『無名草子』作者の視点が、批評そのものには必ずしも価値を置いていないからかも知れない。

「いと見苦しくかたはらいたく侍れど、法華經に所を置き奉り給はしうから御辭退するものも、仏罰をこうむりましようむを、強ひて否び聞えむも、罪得侍りぬべし」

とて縁にのぼりたれば、

「同じことならここへ」

と、中門の廊に呼びのぼせて、畳など敷かせて据ゑられたり。

「十羅刹の御徳に、殿上許され侍りにたり。まして、のちの世もい

生でできるでしようよとど頼もしや」

などと申し上げて、所々うちあげつつ読み奉る。

「いと思はずに。僧などだに、かばかり読むはありがたかめるを」

とて、若き、年長者とが、加わつて、七八人と居並みて、

「今宵は御伽して、やがて居明かさむ。月もめづらし」

など言ひて、集ひ合はれたり。